



Title	回転扉
Author(s)	中山, 信正
Citation	大阪公衆衛生. 1970, 24, p. 1-1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/84342
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



昭和16年の初めの頃であったと思う。内蒙古の陸軍病院で勤務していた時、ある兵隊が流行性脳脊髄膜炎の疑いで送院されて来た。意識ははっきりしているが、激しい頭痛と発熱、項部強直があり、リコールの所見も流脳であることを間違いなく示している。比較的 mild な経過を示しているようだが、このままでは数日のうちに、ずるずると死への道をたどるほかはない。

折しもサルファ剤の進歩はサルファピリヂンを生み出していた頃で、戦地のわが病院にも少量ながら配給されていた。流脳に対して有効であるかどうか、すくなくとも私には判っていなかったが、とにかくこれを試みることにした。入院二日目から投与を開始、翌日回診して見ると、熱はすでに下っている。頭痛はうそのように消えたという。“軍医殿、あれは何という薬ですか。飲んで3時間もしたら、われるような頭痛がスーッと消えて行きました”氷嚢の下の方の兵士の顔は喜色満面である。私も思わず患者の手を取って“よかった”……。

医学の進歩と患者とともに喜んだ瞬間である。1940年代はこのように患者と医師とがともに医学の進歩を喜び合う時代が続いたと思える。永らく人間の生命を奪い、健康を重ねて来た細菌性感染症をほとんど余すところはなく駆逐してくれた。1880年代にはほぼ完成した自然科学としての細菌学は、60年間の学問的ポテンシャルをこの時は開花させたのである。

その後、自然科学としての生物学、医学の進歩はそれぞれの分野の専門の人達から見ると、まことにめざましいものがある。新聞に書かれる解説記事ですら、20年前の専門家の想像を絶する程の進歩であると考えられる。

しかし、患者の側から見ると、その具体的な恩恵を受ける感じは甚だ微温的である。月への旅行が可能な時代に、私のこの病気がどうして治せないのかという不満が、無数の患者の心裡にある。患者の医療への飢餓感は学問としての医学の進歩とむしろ逆行として強くなっている。進歩の頂点についての情報を断片的に受け取っている患者の間には、現実の医療について不満を感じる。学問の進歩が現実には普遍的に民衆の幸福に結実するまでに、非常な努力と日時を必要とすることは観念的には理解出来ても、現実には、自分が病気である患者には辛抱の出来ないもどかしさである。医師に対する漠たる不信がただようこととなる。

現在の医師は、まことに苦悩に満ちた局面に立っていることを自覚すべきである。進歩を押し進める真摯な努力、現実の医療に対する敬虔な態度こそが、この難局を乗り越える道ではなかろうか。

(大阪市衛生局長)